

話しことばにおける縮約形と 日本語教育への応用

堀 口 純 子

1. はじめに

世界各国で日本語を学習している人達は、来日の機会が増えたことや、日本人の海外渡航が増えたことによって、日本人の話しことばに直接触れる機会が増加している。それにともなって、「先生の話す日本語は分かるけど、普通の日本人が話す日本語は分かりません」とか、「授業で習った通りに話したら笑われました」というような訴えも多くなってきた。

例えば、

1) これを持ってってください。

と言われて、渡された物を持ったままでじっと待っていたとか、大学の事務室へ奨学金を受け取りに行ったら、

2) 奨学金の支給日は今日じゃないですよ。

と言われて「じゃないんです」の意味が分からなかったとか、友人に

3) 何してんの。

と言われて、こんなに短い質問なのに答えられなかったというような出来事を話しながら、「普通の日本人が話す日本語は分かりません」と訴えてくる。また、日本人の友人に

4) 何を勉強していますか。

5) 宿題はいつまでにやらなければなりませんか。

のように授業で習った通りに話しかけたら、変な顔をされたり笑われたりしたというのである。

これらの例に見られるように、日本人の話しことばに接した学習者がぶつかる問題の一つに縮約という現象がある。日本語教育における縮約形の扱いには、

二つの立場が並存している⁽¹⁾。一つは縮約形を教えないという立場で、その理由としては、

- ① インフォーマルな場面で使う形である
- ② 文法的な形を優先させるべきである
- ③ 慣れれば分かってくる

などがあげられている。一方、

- ① フォーマルな場面で使う縮約形もある
- ② 文法よりもコミュニケーションを優先させるべきである
- ③ 文法的な形と関連させながら縮約形を教えることも可能である
- ④ 慣れるのを待つのでは時間がかかりすぎる

などの理由から、ある種類の縮約形は積極的に教えようという立場もある。

日本語の教科書で縮約形を積極的に取り入れているものは少ないが、そのいくつかの教科書を見ると、

- ① インフォーマルな場面において

または、

- ② 速く話す時

に現れる形であるというように説明されている⁽²⁾。しかし、土岐(1975)はテレビの教養番組の分析を通して、上記のような教科書の説明は実際に話されている日本語とは必ずしも一致しないということを観察し、したがって学習段階の早い時期から少しずつではあっても縮約形に慣れさせる必要があると述べている。

本稿は、ある種類の縮約形を文法と関連させながら日本語教育に取り入れていこうという立場から、日本語の話しことばにおける縮約形の実態を捉えようとしたものである。なお本稿では、音の省略や縮合によって語が短くなることを縮約と考え、「ある長い形に対応する短い形」⁽³⁾を長い形と対応させながら取り上げていく。

2. 資料について

2.1 生資料

観察の対象としたのは、次の4つのテレビ番組と9つのラジオ番組である。かっこ内は、放送局、放送年月日、番組に登場した話し手の人数、それに番組名の略称である。

- [1] 『徹子の部屋』(テレビ朝日 62年5月8日 2人 『徹子1』)
- [2] 『徹子の部屋』(テレビ朝日 62年5月12日 2人 『徹子2』)
- [3] 『すばらしき仲間』(TBSテレビ 62年5月17日 3人 『仲間1』)
- [4] 『すばらしき仲間』(TBSテレビ 62年5月24日 14人 『仲間2』)
- [5] 『子供と教育電話相談』(NHKラジオ 62年5月8日 7人 『教育1』)
- [6] 『子供と教育電話相談』(NHKラジオ 62年5月12日 7人 『教育2』)
- [7] 『子供と教育電話相談』(NHKラジオ 62年5月14日 5人 『教育3』)
- [8] 『全国自然情報 昆虫の話』(NHKラジオ 62年6月2日 2人 『昆虫』)
- [9] 『全国自然情報 波の話』(NHKラジオ 62年6月3日 2人 『波』)
- [10] 『全国自然情報 鳥の話』(NHKラジオ 62年6月4日 3人 『鳥』)
- [11] 『植物ごよみ』(NHKラジオ 62年6月6日 2人 『植物』)
- [12] 『朝のティータイム ガラスの話』(NHKラジオ 62年6月6日 2人 『ガラス』)
- [13] 『スポーツ情報』(NHKラジオ 62年6月6日 3人 『スポーツ』)

観察の対象となった話し手は52人で⁽⁴⁾、そのうちわけは次の通りである。

① 性別 男：31人 女：21人

② 年齢 10代：1人(女1) 20代：6人(男4 女2) 30代：14人(男6 女8) 40代：15人(男9 女6) 50代：9人(男6 女3) 60代：5人(男4 女1) 70代：2人(男2)

2.2 資料のカード化

上記の番組のコマーシャルを除いたすべての部分(約400分)を文字化し、データベースに入力できるデータ形式に変換した。それをデータベースシステム『忍者2』⁽⁵⁾を用いてカード化した。文字化データの「。」または「?」の印まで、または話し手がかわる直前までを1カードとし、1カードには文のほかにその文に関する情報として、番組、通し番号、会話内番号、キーワード、話し手の5項目を付加した。「番組」という項目はその文がどの番組の中で話されたかということであるが、必ずしも正式な番組名でないものもある。「通し番号」は一番組の中でその文が何番目に出てきたかを表す番号である。「会

話内番号」は一人の話し手の一連続発話の中でその文が何番目に出てきたかを表す。「キーワード」はその文中で検索された縮約形を記入する項目であるが、原カードでは空欄になっている。「話し手」はその文の話し手がだれであるかを表す。

資料1は『徹子1』の最初のやりとりを文字化したもので、それをカード化するとカード1～5のようになる。

資料1

T: まあよくいらして下さいました。まあトラさんのおいちゃんで、皆様よく御存知の今日のお客様。まだ撮影には入っていないんですけど、夏のトラさんに入るもう皆さん2か月くらい前から体調作りですって?

S: そうなんです。健康でないとだめなんでね。

カード1

番組 : 徹子の部屋 (1)
 通し番号 : 1
 会話内番号 : 1
 キーワード :
 話し手 : 黒柳徹子
 文 : まあよくいらして下さいました。

カード2

番組 : 徹子の部屋 (1)
 通し番号 : 2
 会話内番号 : 2
 キーワード :
 話し手 : 黒柳徹子
 文 : まあトラさんのおいちゃんで、皆様よく御存知の今日のお客様。

カード3

番組 : 徹子の部屋 (1)
 通し番号 : 3
 会話内番号 : 3
 キーワード :
 話し手 : 黒柳徹子
 文 : まだ撮影には入っていないんですけど、夏のトラさんに入る
 もう皆さん2か月くらい前から体調作りですって？

カード4

番組 : 徹子の部屋 (1)
 通し番号 : 4
 会話内番号 : 1
 キーワード :
 話し手 : 下条正巳
 文 : そうなんですよ。

カード5

番組 : 徹子の部屋 (1)
 通し番号 : 5
 会話内番号 : 2
 キーワード :
 話し手 : 下条正巳
 文 : 健康でないとだめなんでね。

このような形式で13番組をカード化した結果、4,675枚のカードができた。

2.3 検 索

縮約形とそれに対応するもとの形(これを「原形」ということにする)について、『忍者2』を用いてカードを検索し、原カードファイルから条件を満たすカードを抽出して、そのカード群で新しいファイルを作成した。

例えば「動詞のテ形+補助動詞イク」の縮約形「テク」について検索すると、

4,675枚のカードの中から「てく」という文字列を含んだすべてのカードが抽出される。抽出されたカードを一つ一つ確認して、縮約形の「テク」でないカードは削除し、縮約形「テク」のカードだけで新しいファイルを作る。削除するのは例えば、

6) 2, 3歩出ただけでまたお店に帰ってくるから。(『徹子1』)

のようなカードである。次に、新しくできたファイルのすべてのカードのキーワードの項目に「てく」というキーワードを記入する。

検索—確認—非該当カードの削除—新ファイルの作成—キーワードの記入という手順を縮約形「テク」とそれに対応する「テイク」のそれぞれのすべての活用形について繰り返すことによって、「動詞のテ形+補助動詞イク」の縮約形の実態が明かになってくる。

このような方法で上記の番組に現れた縮約形とその原形を検索したのであるが、本稿で観察の対象とした縮約形は、

- ① 個人的でない
- ② 一時的でない
- ③ 仮名で表記できる

という3つの条件をそなえたものに限った。聞き取りのためにはこれらの条件を欠いた形も無視することはできないが、初期の日本語教育では、ある程度一般的で規則的で教科書に漢字仮名交じりで例文が出せるようなものを優先させるべきだと考えるからである。

3. 「ノ」>「ン」

3.1 「ノ德斯」>「ン德斯」

初級日本語の教科書には次のような「ノ」が提出されている。

- 7) わたしはにほんごのせんせいです。(『日本語初歩』1課)
- 8) たかいのもやすいのもあります。(同上6課)
- 9) 字を書くのに使います。(同上20課)
- 10) ジョンさんのうつつしたしゃしんを見ました。(同上20課)
- 11) どんな仕事につくのですか。(同上21課)

このうち7)~10)のような「ノ」は話しことばでも「ノ」の形で使われるが、11)のような「ノ」は話しことばでは「ン」になることが多い。

資料の中で最も使用率が高かった縮約形は、11)のような用法の「ノ」の縮

表1 資料に現れた「ン」と「ノ」の用例数⁽⁶⁾

後続形式	縮約形と原形	ン	ノ	計
一デス		1,024	17	1,041
一ダ		97	3	100
一デハナイ		1	10	11
一ジャナイ		45	0	45
計		1,167例 (98%)	30例 (2%)	1,197例 (100%)

約形の「ン」であった。その実態は表1の通りである。

全用例1,197例のうち1,167例(98%)が「ン」になっている。その中でも特に多い「ンデス」1,024例を詳しく見ると、「ンデス」で文が終わっているのは174例で、そのほか「ンデスケ(レ)ド(モ)(ネ)」(229例, 例12), 「ンデスヨ(ネ)」(198例), 「ンデスネ」(174例, 例13), 「ンデスガ(ネ)」(84例), 「ンデスカ」(71例), 「ンデスッテ(ネ)」(32例), 「ンデショウネ」(28例), 「ンデショウカ」(23例), その他(11例)などのような形で使われている。

12) 奇抜な名前をつけるつもりでつけたわけではないんですけどね。(『徹子1』)

13) 東西交流史ってゆうのをやってたんですね。(『ガラス』)

「ノ」より「ン」が多いということと同時に、「デス」の後に「ケレド」「ネ」「ヨ」「ガ」などの続く用例が多いということにも話しことばの特徴が見られる。同様のことは「ンダ」の97例にも見られ、使用数の多い方から「ンダケドネ」(例14)「ンダネ」「ンダヨネ」となっている。

14) 一つの尺度がほんとはあればいいんだけどね。(『仲間1』)

文法的には「ノダ文」という用語で取り上げられ、日本語の教科書には「ノデス」という形で出ているのが普通である。しかし、話しことばにおける「ンデス」の使用量の多さから言っても、「ノデス」に対する「ンデス」の使用率の高さから言っても、「ンデス」は日本語教育の早い時期からもっと積極的に取り入れるべきである。ただし、同じ「ノデス」であっても次の15)のような用法では「ンデス」にならないということに注意しておく必要があるが、これは同時に15)と16)の文法的な違いの理解を強化することにもなる。

15) 小さいくつはラタナーさんのです。(『日本語初歩』6課)

16) 歯が痛いのです。(同上 24課)

「デス」の否定「デハナイ」またはその縮約形の「ジャナイ」が後続する例を見ると、「ンジャ」が45例で「ノデハ」が10例であるのに対して、「ンデハ」は1例で「ノジャ」は0である。用例が少ないのではっきりしたことは言えないが、「ン」と「ジャ」のような縮約形同士または「ノ」と「デハ」のような非縮約形同士の方が連続しやすく、「ン」と「デハ」または「ノ」と「ジャ」のような縮約形と非縮約形とは連続しにくいと言えよう。

3.2 「モノデス」 > 「モンデス」

形式名詞の「モノ」とその縮約形「モン」の実態は表2の通りである。全部で64例と少ないが、そのうち51例(80%)が「モン」という形で、その51例のうち43例が「モンデス」、8例が「モンダ」である。「モンデス」は43例中半数以上の26例が「モンデスカラ」という形で使用されている。

「モノデス」は日本語の教科書では中級で提出されるのが一般的で、次のような例文が出ている。

17) サラリーマンというのは辛いものだ。(“Intensive Course in Japanese Intermediate” 11課)

18) 日本に着いてすぐのころは、言葉が通じなくて困ったものだ。(同上 13課)

教科書に出ているのは主に「モノダ」という形で、意味的には当然とか感動とか過去の回想などを表すものである。しかし、資料では「モノダ」という形は一度も使われず、また意味的にも例19)のような「モンデスカラ」が26例、「モンダカラ」が3例と半数近くが理由を表す用法であった。

19) 今日ね (はい)⁽⁷⁾ 大分希望者の方が多いもんですから。(『教育2』)

中級では17) 18) のような「モノダ」を文法的に取り上げなければならないが、練習では場面設定をした応用会話などで「モンデスカラ」「モンデスネ」などが使えるようにしていくべきであろう。

表2 資料に現れた「モン」と「モノ」の用例数

後続形式 \ 縮約形と原形	モン—	モノ—	計
—デス	43	13	56
—ダ	8	0	8
計	51例 (80%)	13例 (20%)	64例 (100%)

3.3 「ノデ」>「ンデ」

接続助詞の「ノデ」は話しことばでは「ンデ」になることがあるが、資料では「ノデ」54例に対して「ンデ」は73例（58%）で、例えば20)のように使われている。

20) 人工芝を敷いてあるということですから、まあころんでも大丈夫ではないかという気がしてるんですけどね。（『スポーツ』）

日本語教育で「ノデ」が提出されるのは初級の中期であるが、これが話しことばでは「ンデ」になることがあるということは特に取り上げる必要はないだろう。ただ実際には「ノデス」が「ンデス」になるという現象から推測して「ンデ」を使うようになる学習者もある。

学習者が「ンデ」という発音があることに気が付いたり、あるいは実際にそれを使ったりした時には、「ノデ」は「ンデ」になることがあるが「ノニ」は「ンニ」にはならないということに言及しておいた方がよいらろう。「ノデ」と「ノニ」は提出時期が近く、また対比しながら教えられることが多いため、「ノデ」が「ンデ」になるなら「ノニ」も「ンニ」になるというような推測をしかねないからである。

3.4 その他

ラ行動詞の「ル」の後に「ノダ」または「ノデス」が続くと、「ルノ」>「ルン」>「ン」、または「ルノ」>「ンノ」>「ン」という過程を経て、「ルノ」が「ン」になる場合がある。資料に現れたのは、「アンデス」(<「アルノデス」)と「来ンデス」(<「来ルノデス」)が3例ずつ、「アンノ」(<「アルノ」)と「スンデス」(<「スルノデス」)が2例ずつ、「アンダ」(<「アルノダ」)、「考エンジャ」(<「考エルノデハ」)、「作ンデス」(<「作ルノデス」)、「ナンダ」(<「ナルノダ」)が各1例ずつで、例えば21)のように使われている。

21) 台所入ってね、自分で勝手に作んですよ。（『仲間2』）

形式名詞「モノ」が助詞化して文末に使われることがあり、これは主に女性が使うと言われているが、資料に出てきたのは22)の例1つだけで話し手は男性である。

22) だってだってケンちゃんの通り道だったんだもの。（『仲間1』）
助詞化した文末の「モノ」が「モン」になることは、あるけれども多くはない。資料には5例あったが、いずれも「モンネ」か「モンナ」の形で現れ、鳥好きの男性3人が鳥について話し合っている場面に出てきたものである。

普通名詞の「モノ」も

23) だから死骸とかってもんしか。(『仲間1』)

のように「モン」になることもあるが、「モノ」に比べて使用率は低く、資料に現れたのは1例だけである。

上にあげた、「ルノ」の縮約形の「ン」、助詞化した文末の「モン」、普通名詞「モノ」の縮約形の「モン」は、用例も少なく使用率も低いので、日本語教育では特に取り上げる必要はなく、生の音声教材などに現れた場合も理解レベルでとどめておいてよいだろう。

4. 「デハ」>「ジャ」

初級日本語の教科書には次のような「デハ」が提出されている。

24) わたしはフランスじんではありません。(『日本語初歩』1課)

25) では、しつれいします。(同上 14課)

26) それでは、大きいのを三本ください。(同上 6課)

上の例のどの「デハ」も話しことばでは「ジャ」になることが多い。実態は表3の通りである。

全用例211例のうち172例(82%)が「ジャ」である。中でも特に注目したいのは、「～デハナイ/ナク/ナカッタ/アリマセン」が24例であるのに対して、「～ジャナイ/ナク/ナカッタ/アリマセン」が135例と6倍近い頻度で現れているという点である。

日本語教育では多くの場合第1課で「～デハアリマセン」が導入され、以後

表3 資料に現れた「ジャ」と「デハ」の用例数

接統形式	縮約形と原形	ジャ	デハ	計
文 頭		29	5	34
ソレー		8	10	18
ーナイ	} 135	98	13	111
ーナク		30	9	39
ーナカッタ		1	1	2
ーアリマセン		6	1	7
計		172例 (82%)	39例 (18%)	211例 (100%)

ずっとこの形が使われる。最近出版された初級の日本語教科書には「～ジャアリマセン」を採用する傾向が見られ、また伝統的な教科書でも初級から「～ジャアリマセン」を提出しているものも少なくはない⁽⁸⁾が、まだ日本語教育では「～デハアリマセン」が主流である。しかし、話しことばの資料から得た上のような結果から考えると、日本語の教科書でも教室の練習でももっと「～ジャアリマセン」を取り入れるべきであろう。

5. 「動詞のテ形+補助動詞」

初級の日本語教科書に提出される「動詞のテ形+補助動詞」には、「～テイル」「～テアル」「～テシマウ」「～テイク」「～テクル」「～テオク」「～テミル」「～テアゲル」「～テクレル」「～テモラウ」「～テヤル」「～テクダサル」「～テイタダク」などがある。そのうち縮約形になるのは、「～テイル」「～テシマウ」「～テオク」「～テイク」「～テアゲル」の5つであるが、今回の資料には「～テアゲル」の縮約形「～タゲル」はなかった。

5.1 「～テイル」>「～テル」

初級の日本語教科書には次のような「～テイル」が提出されている。

27) 雨がふっています。(『日本語初歩』16課)

28) 父ははいしゃをしています。(同上 16課)

29) 戸があいています。(同上 18課)

このほかにも「～テイル」の用法はあるが、どの用法も縮約形「～テル」の形で使うことができる。資料における「～テイル」(「～デイル」を含む)と「～テル」(「～デル」を含む)の使用の実態は表4の通りである。

表4 「動詞のテ形+イル」の縮約形と原形の用例数

後続形式	縮約形と原形	～テー	～テイー	計
ー		392	138	530
ーマス		79	9	88
ーラッシュイマス		37	29	66
計		508例 (74%)	176例 (26%)	684例 (100%)

「～テル」は他の縮約形と比べて、使用数においては508例で「ン」に次いで多く、使用率においても74%で3番目に高い。30) 31) はその用例である。

30) グラススキーのゲレンデができてるようですねえ。(『スポーツ』)

31) 電源は主にその電池を使ってたわけです。(『波』)

日本語教育では、29) のような結果の状態を表す「～テイル」は次のように「～テアル」と比較しながら教えられることが多い。

29) 戸があいています。(『日本語初歩』18課)

32) 戸があけてあります。(同上)

33) 火がきえています。(同上)

34) 火がけしてあります。(同上)

両者の違いを明確にしようとする、ことさら「イル」と「アル」の形の上での違いが強調される。例えば、教師が「火が消エテ」で文を切ってその後を学習者に言わせるというような練習では、学習者は「イマス」と答えなければならない。極端な場合には、「イ」か「ア」かということに目が向けられてしまうことさえある。

しかし、話しことばではこの「イ」は4回のうち3回は発音されないのである。したがって、日本語教育でも早い段階から「～テル」を導入して、聞いて分かり、しかも使えるようにしていくべきである。この形は、「～テイル」は「～テル」、「～デイル」は「～デル」と簡単なので、容易に習得できるだろう。

5.2 「～テシマウ」> 「～チャウ」

「動詞のテ形+シマウ」について資料を見ると、「～テシマウ」(「～デシマウ」を含む) 39例に対して縮約形「～チャウ」(「～ジャウ」を含む) は84例であった。全用例123例中68%が縮約形なので使用率は低くないが、実数が84例と少なく、しかも資料では使用者が限られていた。

日本語教育では「～テシマウ」は初級中期に提出されるが、その縮約形は、上のような実態を見ると、特に教える必要はないだろう。ただ、生の音声教材などに現れた場合、「～チャウ」から「～テシマウ」を、あるいは「～ジャウ」から「～デシマウ」を想起するのは学習者にとっては困難なことなので、教師の説明が必要になる。

説明とともに次のような練習が考えられるが、学習者が縮約形を使うような練習は必要ない。

- 35) 教師：食べちゃう
 学習者：食べてしまう
 教師：飲んじゃう
 学習者：飲んでしまう

5.3 「～テイク」>「～テク」

「動詞のテ形+イク」について資料を見ると、「～テイク」64例に対して、縮約形「～テク」は19例で、例えば 36) 37) のような用例がある。

36) あれ自然になくなってくもんじゃないんですか。(『鳥』)

37) “Z” から破いてったのね。(『徹子1』)

「テク」の19例は全用例83例の23%で、この用例数と使用率なら日本語教育で特に取り上げる必要はなからうが、生の音声教材などに現れた場合には聞き取りの困難な縮約形である。

それは一つには、「テク」も「テル」と同じように「イ」が脱落してできた縮約形ではあるが、「テル」と違って「ク」の母音が無声化するからである。もう一つは、縮約形「テク」が「動詞のテ形+クル」とまぎらわしいということである。この混乱を避けるためには、表5のような対照表を用意して、耳だけでなく目でも確認させる必要がある。

この中で特に、「～テ来マス」と「～テ狩キマス」は形の上では全く同じで、アクセントも同じなので、文脈がなければ区別することはできないということも言っておいた方がよいだろう。

表5 「～テクル」と「～テイク」(原形、縮約形)の対照表

基本形 活用形	～テクル	～テイク	
		～テイク	～テク
～マス	～テキマス	～テイキマス	～テキマス
～タ	～テキタ	～テイツタ	～テッタ
～ナイ	～テコナイ	～テイカナイ	～テカナイ
～ウ	～テコヨウ	～テイコウ	～テコウ
～バ	～テクレバ	～テイケバ	～テケバ

5.4 「～テオク」>「～トク」

「動詞のテ形+オク」について資料を見ると、全用例数は25例で、そのうち縮約形「～トク」は13例（52%）で、例えば38)のように使われている。

38) 生活の楽しみを教えとかないとねえ。(『教育1』)

「～テオク」と「～トク」を使用率から見ると半分は縮約形だが、実数が少ないので、この資料の結果が一般的傾向とは言い切れない。「～テオク」は日本語教育の初級後期に提出されるが、上のような実態を見ると、縮約形「～トク」は特に取り上げる必要はないと言えよう。

5.5 「動詞のテ形+補助動詞のテ形+補助動詞」の縮約形

「動詞のテ形+補助動詞」のうち「～テシマウ」と「～テイク」はそのテ形の後にさらに補助動詞を取ることができる。例えば、「持ッテイク」のテ形に補助動詞「イル」が付いて「持ッテイッテイル」のように使うことができる。

これの縮約形としては、その前部のみを縮約形にした「持ッテッテイル」、後部のみを縮約形にした「持ッテイッテル」、両方を縮約形にした「持ッテッテル」の3つが考えられる。「～テシマッテ+補助動詞」と「～テイッテ+補助動詞」について、それぞれ3種類の縮約形を一覧表にすると、表6のようになる。

実際にはこれらの使用例は少なく、資料では、「～テイッテイル」の後部が縮約形になった「～テイッテル」が1例(例39))と、「～テシマッテイル」の前後部両方が縮約形になった「～チャッテル」が5例(例40)41))で、合計6例であった。

39) 普通の病院じゃないから(ええ)、胸の方だから(はあ)、あんまり小さ

表6 「～テシマッテ/～テイッテ+補助動詞」の縮約形

前部補助動詞		～テシマッテ			～テイッテ		
後部補助動詞	縮約箇所	前部補助動詞縮約	後部補助動詞縮約	両補助動詞縮約	前部補助動詞縮約	後部補助動詞縮約	両補助動詞縮約
—イル		～チャッテイル	～テシマッテル	～チャッテル	～テッテイル	～テイッテル	～テッテル
—シマウ		×	×	×	～テッテシマウ	～テイッチャウ	～テッチャウ
—イク		～チャッテイク	～テシマッテク	～チャッテク	×	×	×
—オク		～チャッテオク	～テシマットク	～チャットク	～テッテオク	～テイットク	～テットク

い子は連れて入れないけど（あーあ）、窓越しにとかまあ連れていって
た⁽⁴⁰⁾んですけどねえ。（『教育2』）

40) 体だってなんかこうがっちりしちゃってるし。（『仲間2』）

41) 親に逆らっちゃいけないっていうこう教えが非常に強かったもんだから
（ええ）、素直な子を求める（ええ）ようになっちゃってる。（『教育
1』）

上記のような縮約形は日本語教育で特に取り上げる必要はなからうが、生の
音声教材などに現れた場合には、「～テッテル」も「～チャッテル」も促音を含
んでいるだけに聞き取りの困難な縮約形である。

6. 「～バ」の縮約形

6.1 「～ケレバ」の縮約形

助動詞の「ナイ」または形容詞に「バ」が付いた「～ケレバ」は、話しこと
ばでは次の例のように「～ケリャ」または「～キャ」の形で使われることがあ
る。

42) 近けりゃ行くけどね。

43) 高くなきゃ買うんだけど。

資料では、全用例39例中28例（72%）が縮約形だった。そのうち27例が「～
キャ」で、「～ケリャ」は1例だけであった。ただ、27の「～キャ」の用例は
すべて形容詞の「ナケレバ」または助動詞の「～ナケレバ」の縮約形の「(～
ナキャ」で、他の形容詞の例はなかった。44)45)46)は資料中の用例である。

44) それは帰らなきゃいけないわけでしょ。（『鳥』）

45) あのちょっとこゝろ目を見なきゃ芝居できないのでね。（『徹子1』）

46) 種として生き残らなけりゃならない。（『仲間1』）

一般に、「ナイ」以外の形容詞は話しことばでもあまり縮約形にはならず、
なる場合には、

47) 近きゃ行くけどね。

のような「～キャ」より42)のような「～ケリャ」の方がよく使われる。特に
「シイ」で終わる形容詞に「バ」が付いた「～シケレバ」の縮約形は、「～シ
キャ」ではなく「～シケリャ」が普通である。

助動詞の「ナイ」または形容詞に「バ」の付いた「～ケレバ」は日本語教育
では初級の後半に提出されるが、上のような観察結果や一般の傾向を見ると、

縮約形を教える必要はなかろう。ただ、やはり同じ頃に出る「～ナケレバナラナイ」「～ナケレバイケナイ」については、縮約形も出した方がよいだろう。なぜならば、資料の「～ナキャ」27例はそのうち15例が「～ナキャイケナイ」で2例が「～ナキャナラナイ」であり、また一般にも話しことばでは「～ナケレバイケナイ／ナラナイ」より「～ナキャイケナイ／ナラナイ」の方がよく使われているからである。

6.2 「動詞+バ」の縮約形

「動詞+バ」の縮約形は、表7から分かるように、「バ」とその直前の音がそれと同じ行のア段の拗音になった形である。例えば、「待テバ」は「待チャ」に、「降レバ」は「降リャ」になる。ただし、「～エバ」は「～ヤ」になる。このうち資料に出てきたのは、「～リャ」3例と「～キャ」1例の計4例だけであった。「バ」の付いた形は77例あったので、縮約形の使用率はわずか5%である。資料では48)49)のように使われていた。

48) ほめりゃいいんですよ。(『教育2』)

49) ごめんなさいって言うておきゃね先生は喜ぶんだっていうふうな処世法を身につけるっていうことはあんまりいいことじゃないですね。(『教育3』)

「動詞+バ」は日本語教育では初級の後半で、上述の「～ケレバ」と同時に提出されることが多いが、上のような観察結果を見ると、縮約形を特に教える必要はないだろう。

表7 「動詞+バ」の縮約形

語	例	原 形	縮 約 形
買	う	～エバ	～ヤ
書	く	～ケバ	～キャ
指	す	～セバ	～シヤ
待	つ	～テバ	～チャ
死	ぬ	～ネバ	～ニヤ
飲	む	～メバ	～ミヤ
降	る	～レバ	～リャ
泳	ぐ	～ゲバ	～ギャ
飛	ぶ	～ベバ	～ビャ

7. 「～テハ」の縮約形

7.1 「～クテハ」の縮約形

助動詞の「ナイ」または形容詞に「テハ」が付いた「～クテハ」は、話しことばでは次のように「～クチャ」の形で使われることがある。

50) こんなに小さくちゃ着られない。

51) 運動しなくちゃ足から弱っていきますよ。

資料には「～クテハ」は1例もなく、縮約形の「～クチャ」が4例あった。しかも4例とも助動詞「～ナクテハ」の縮約形「～ナクチャ」で、そのうち3例は「～ナクチャイケナイ」という形で使われている。52) は資料中の用例である。

52) いつもクリーンにね家の中はしておかなくちゃいけないと。(『昆虫』)

助動詞の「ナイ」または形容詞に「テハ」の付いた「～クテハ」は、日本語教育では初級の後半に提出されるが、それはほとんど次の例のように「～クテハイケマセン」という形で出されている。

53) かえりがおそくてはいけません。(“Intensive Course in Japanese Elementary” 32課)

資料中の「～クチャ」の用例は少ないが、それでも4,675枚のカードの中に「～クテハ」が1例もないということから考えると、日本語教育でも「～クテハ」を教えるなら縮約形の「～クチャ」も教えた方がよいのではないだろうか。ただし50)51)のような「～クチャ」は出す必要はなく、「～クチャイケマセン」だけを一つのまとまった言い方として出すのがよいだろう。

7.2 「動詞+テハ」の縮約形

「動詞+テハ」は、話しことばでは「～チャ」または「～ジャ」の形で使われることがある。例えば、「言ッテハ」は「言ッチャ」に、「書イテハ」は「書イチャ」に、「飛ンデハ」は「飛ンジャ」になる。

資料の用例は、「～テハ」が26例であるのに対して縮約形の「～チャ」は13例で、全用例に対する縮約形の使用率は33%であった。54)55)は資料中の用例である。

54) なんかこう家作っちゃ悪いとかって。(『仲間1』)

55) お前頭がおかしいとかゆっちゃいけませんよ。(『教育2』)

日本語教育では「動詞+テハ」は初級の後半で、上述の「～クテハ」と同時

に提出されることが多いが、「～クテハ」同様次の例のように「～テハイケマセン」という形で出されている。

56) にくを食べてはいけません。(“Intensive Course in Japanese Elementary” 32課)

「動詞+テハ」は資料の中では縮約形より原形の方が多く使われているということから考えると、日本語教育では縮約形を出す必要はないと言えそうだが、形容詞の場合に縮約形の「～クチャイケマセン」を出すのであれば、動詞の場合も「～チャイケマセン」を出しても学習者の負担にはならないだろう。

8. 「～ラナイ」>「～ンナイ」

ラ行5段動詞に否定の「ナイ」が付いた「～ラナイ」は話しことばでは「～ンナイ」になることがある。資料の用例は、「分カンナイ」15例、「知ンナイ」3例、「ナンナイ」「ヤンナイ」「入ンナイ」各1例と、形容詞「ツマラナイ」の「ラナイ」が「ンナイ」になった「ツマンナイ」4例で、全部で25例である。これらの語が「～ラナイ」という形で使われているのは59例あり、「～ンナイ」の使用率は30%である。

初級の日本語教科書には20～30位のラ行5段動詞が出ていて、上述の語もほとんどの教科書に出ているが、その否定形が話しことばでは「～ンナイ」になることがあるということは特に教える必要はないだろう。

9. 「コ/ソ/アレハ」>「コ/ソ/アリャ」

話しことばでは「コレハ」は「コリャ」に、「ソレハ」は「ソリャ」に、「アレハ」は「アリャ」になることがある。資料では、「コレハ」は93例で「コリャ」は3例(3%)、「ソレハ」は66例で「ソリャ」は22例(25%)、「アレハ」は16例で「アリャ」は0であった。

「コリャ」と「アリャ」に比べて「ソリャ」が多いのは、相手の言ったことの一部または全部を受けた上で自分の話を続けていくという型のコミュニケーションにおいて、受けに使われる語が「ソレ」だからである。資料の「ソリャ」もすべて、

57) そりゃそうでしょうね。(『徹子1』)

58) そりゃありがたいですねえ。(『教育1』)

のように相手の言ったことを受けるのに使われている。

「コレハ」「ソレハ」「アレハ」はほとんどの日本語教科書で1課に出てくるが、初級では縮約形は教えずによいだろう。コミュニケーションを重視する場合でも、「ソリャソウデス」だけは導入した方がよいという立場と、「ソウデスネ」が使えれば十分だという立場がある。

10. 「～トイウ」>「～テ」

引用の助詞「ト」は、話しことばでは「テ」または「ッテ」になることが多く、資料には684例の「(ッ)テ」が現れた。

この中で縮約形として注目したいのは「イウ」のない形で、資料には「～(ッ)テ。」「～(ッ)テ+名詞」「～(ッ)テ+～」のような形で現れている。

話しことばでは「～(ッ)テ。」で話が終わることがある。資料にはこの用例が93例あり、例えば次のように使われている。

59) カケスがやってるんですって。(『仲間1』)

60) 写真にとりたくて来たって。(『仲間2』)

1文だけでは意味をはっきりしないが、文脈の中で考えると、「～(ッ)テ」は基本的には伝聞を表し、時にはそれにさらに疑問や驚きや喜びや悲しみなどの感情まで含むこともある。「～トイウコトダ。」「～ト言ッテイル。」「～ト聞イタ。」など、さらにイントネーションによっては「～トイウコトカ。」「～ト聞イタケド本当カ。」などの表現が「～(ッ)テ。」という形で表せるのであるから、日本語学習者にも会話の授業などで導入すると、広く応用できるだろう。

「～(ッ)テ+名詞」は「～トイウ+名詞」の縮約形と考えてよかろう。この形は87例あり、多いのは「～(ッ)テノ」(37例)と「～(ッ)テコト」(23例)である。例えば次のように使われている。

61) あの蚕が桑を食べる音ってのは (はい) ほんとにすごいもんですね。
(『植物』)

62) 100ワット以上のその電球をつけるってことはこういうところでは非常に難しかったわけです。(『波』)

「～(ッ)テ+名詞」の87例は、「～トイウ+名詞」が117例で「～(ッ)テイウ+名詞」が184例であるのに比べると、多い数ではないが、日本語の教科書にはあまり取り入れられていない形なので、生の音声教材を使う場合などには注意する必要がある。

「～(ッ)テ+～」というのは、次のような使い方である。

63) 東京ってこういう所なんだよって話をしてもらうとか。(『教育2』)

64) スタジオってあの事務所なんですけどね。(『鳥』)

65) ジャあ次って走り出すっていうように。(『鳥』)

63)は「トイウノハ」が、64)は「トイッテモ」が、65)は「トイウヨウニ」が、それぞれ「ッテ」という形で現れているものである。このような用例は36例あった。日本語教育の生の音声教材などにこのような「ッテ」があった場合は、「トイウ」に言いかえるなどして、その意味をしっかりとつかませる必要がある。

11. 結 び

2人以上の人が話をやりとりしているテレビとラジオの番組約400分を資料として、話しことばに現れる縮約形の実態を観察した。その結果、本稿で縮約形として取り上げた形式が現れた使用例の総数は2,428例で、これは全資料4,675例の52%にあたる。単純に考えれば、2文のうち1文に必ず1つは縮約形が使われているということになる。

話しことばに特徴的に現れる形式はこのほかにもいろいろある。その中でも今回の資料で割合用例が多かったのは次のようなものである。

① 「名詞+ノ+名詞」の「ノ」が「ン」になる。(24例)

66) 日本人の絵かきの役が突然ぼくんとこに回ってきたんで。(『徹子1』)

② 「名詞+ニ」の「ニ」が「ン」になる。(9例)

67) 心の支えんなっているとゆうことですよ。(『仲間2』)

③ 「～テモ/デモ」が「～タッテ/ダッテ」になる。(42例)

68) 勉強なんかできなくたって世の中で生きてくのうまい人もいるしね。(『教育2』)

69) ウグイスの谷渡りだってあれは警戒音なんですよ。(『仲間2』)

日本語学習者が教科書を通して習ったことが、実際の話しことばではこんなに頻繁に教科書と違う形で現れるのであるから、「日本人の言っていることが分からない」とか「習った通り言ったら笑われた」というようなことが起こるのも無理はない。コミュニケーションを目指した日本語教育では、いかに話すかというだけでなく、いかに聞くかということも重要な能力である。聞く能力を養うためには、聴解の指導項目の一つとして話しことばに頻繁に現れる縮約形を体系的に取り入れていくことが必要であろう。

注

- (1) 『日本語教育事典』 p. 51.
 - (2) Alfonso (1974) p. 500.
日本研究センター (1984) p. 52.
 - (3) 『日本語教育事典』 p. 51.
 - (4) 話し手の延べ人数は54人であるが、そのうち2人は2つの番組(黒柳徹子が〔1〕と〔2〕, 女性アナウンサーが〔7〕と〔10〕)に出ているので、登場した人は52人になる。各番組の話し手は次の通りである。
- 〔1〕 黒柳徹子 (タレント 50代), 下条正巳 (俳優 60代)
 - 〔2〕 黒柳徹子, 汀夏子 (女優 30代)
 - 〔3〕 岩本久則 (漫画家 47歳), 服部克久 (作曲家 50歳), あおい輝彦 (俳優 39歳)
 - 〔4〕 秋山庄太郎 (写真家 70代), 井上和男 (映画監督 60代), 石渡幸二 (出版社社長 50代), 井手俊郎 (脚本家 60代), 藤田進 (俳優 70代), 金子正且 (並木座支配人 50代), 司葉子 (女優 50代), 杉葉子 (女優 50代), 原節子ファン 2名 (女性 60代, 男性 60代), 早稲田大学映画文化研究会学生 4名 (20代)
 - 〔5〕 平井信義 (大妻女子大学教授 50代), 相談者 (主婦 20代) 1名, 相談者 (主婦 30代) 3名, 相談者 (主婦 40代) 1名, 男性アナウンサー (40代)
 - 〔6〕 塚原雄太 (評論家 50代), 相談者 (主婦 20代) 1名, 相談者 (主婦 30代) 1名, 相談者 (主婦 40代) 3名, 男性アナウンサー (30代)
 - 〔7〕 遠藤豊吉 (評論家 50代), 相談者 (主婦 30代) 2名, 相談者 (主婦 40代) 1名, 女性アナウンサー (40代)
 - 〔8〕 昆虫学者 (男性 40代), 男性アナウンサー (30代)
 - 〔9〕 海上保安庁燈台部職員 (男性 30代), 男性アナウンサー (40代)
 - 〔10〕 日本野鳥の会会員 (女性 30代), バードソン参加者 (女性 14歳), 女性アナウンサー (40代)
 - 〔11〕 進化生物学研究所職員 (男性 40代), 男性アナウンサー (40代)
 - 〔12〕 ガラス研究者 (男性 40代), 男性アナウンサー (40代)
 - 〔13〕 スキー場職員 (男性 40代), スポーツ記者 (男性 30代), 男性アナウンサー (30代)
- (5) サムシンググッド発行 日本語カード型データベース Ninja (忍者) 2
 - (6) 表中の縦の欄の「一」には横の欄の語が, 横の欄の「一」には縦の欄の語が入る。例えば, 「ンー」は「ン」の後に縦の欄の「デス」「ダ」「デハナイ」「ジャンナイ」が入るということで, 「一デス」は「デス」の前に「ン」「ノ」が入るということである。表(2)~(6)でも同様。
 - (7) 例文中の「(はい)」は聞き手の相づちである。話し手の話に重なるように出てくる相づちで, 話を聞いているという合図を表す, 言いかえれば合図以外の意味を担っていない短い相づちはこのように記述した。以下の例文でも同様。
 - (8) "Modern Japanese for University Students Part I" (ICU 1963) では, 1課から「ジャアリマセン」で通している。

- (9) 「連レル」は「連レテ行ク」「連レテ来ル」「連レテイル」のような形で使うのが普通である。したがって、これらを「動詞のテ形+補助動詞」ではなく1つの動詞と考えれば、例(39)の「連レテイツタ」は動詞「連レテイク」のテ形に補助動詞「イル」の過去形が続いた「連レテイツタ+イタ」の縮約形という解釈も可能である。

参考文献

- (1) Alfonso Anthony 1974 "Japanese Language Patterns" Sophia University L.L.
- (2) 天沼寧, 水谷修, 大坪一夫, 1978『日本語音声学』くろしお出版。
- (3) 今田滋子, 1974「進んだ段階における話し言葉の指導—上級の聴解指導の問題点(1)(2)—」『日本語教育』23号, 24号。
- (4) 今田滋子, 1976「日本語の発音指導の問題点」『講座日本語教育』第12分冊, 早稲田大学語学教育研究所。
- (5) 大西雅雄, 1934『応用音声学』明治書院。
- (6) 国語学会編, 1980『国語学大辞典』東京堂出版。
- (7) 国際交流基金, 1983『教科書解題』。
- (8) 国際交流基金, 1986『発音』凡人社。
- (9) 土岐 哲, 1975「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28号。
- (10) 土岐 哲, 1988「聞き取り基本練習の範囲」『日本語教育』64号。
- (11) 日本音声学会編, 1976『音声学大辞典』三修社。
- (12) 日本語教育学会編, 1982『日本語教育事典』大修館書店。
- (13) 根間弘海, 1982『音韻分析の周辺』晃学出版。
- (14) 文化庁, 1978『音声と音声教育』。
- (15) 水谷 修, 水谷信子, 1979 "Aural Comprehension Practice in Japanese Language" ジャパンタイムス社。
- (16) Mizutani Osamu, Mizutani Nobuko 1982 "An Introduction to Modern Japanese" ジャパンタイムス社。

参考にした日本語教科書

- (1) 海外技術者研修協会, 1974『にほんごのきそI』。
- (2) 国際交流基金, 1983『日本語初歩I II』凡人社。
- (3) 国際基督教大学, 1963 "Modern Japanese for University Students Part I"
- (4) 対外日本語教育振興会, 1970 "Intensive Course in Japanese Elementary" ランゲージ・サービス。
- (5) 対外日本語教育振興会, 1980 "Intensive Course in Japanese Intermediate" ランゲージ・サービス。
- (6) 日本研究センター編, 1984 "Basic Japanese—A Review Text"
- (7) 水谷 修, 水谷信子, 1979 "Aural Comprehension Practice in Japanese Language" ジャパンタイムス社。

- (8) Mizutani Osamu, Mizutani Nobuko 1982 "An Introduction to Modern Japanese" ジャパンタイムス社。